

埋藏文化財緊急発掘調査

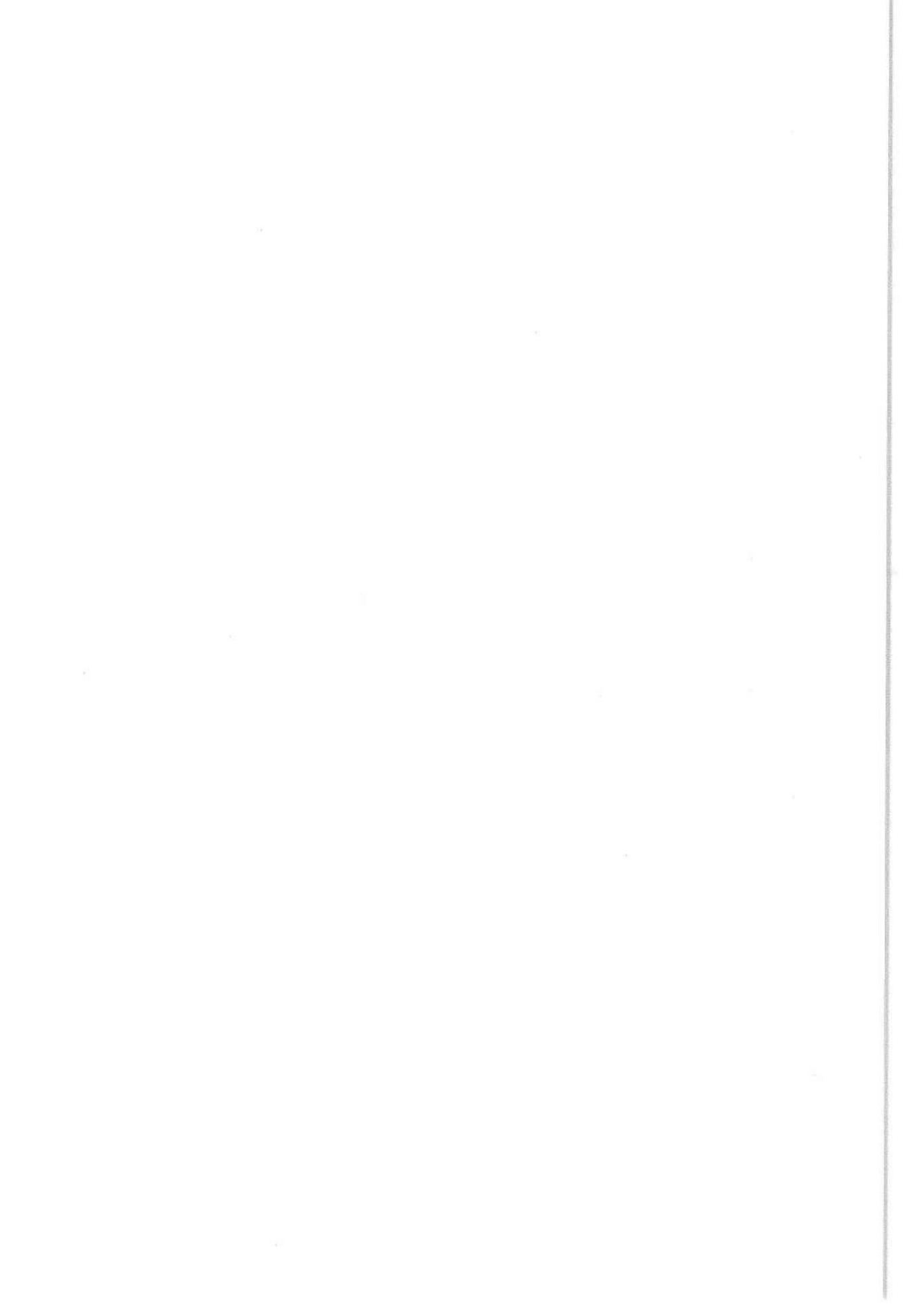
大芝東遺跡

——緊急発掘調査報告書——

1 9 7 5

南箕輪村教育委員会

南信土地改良事務所



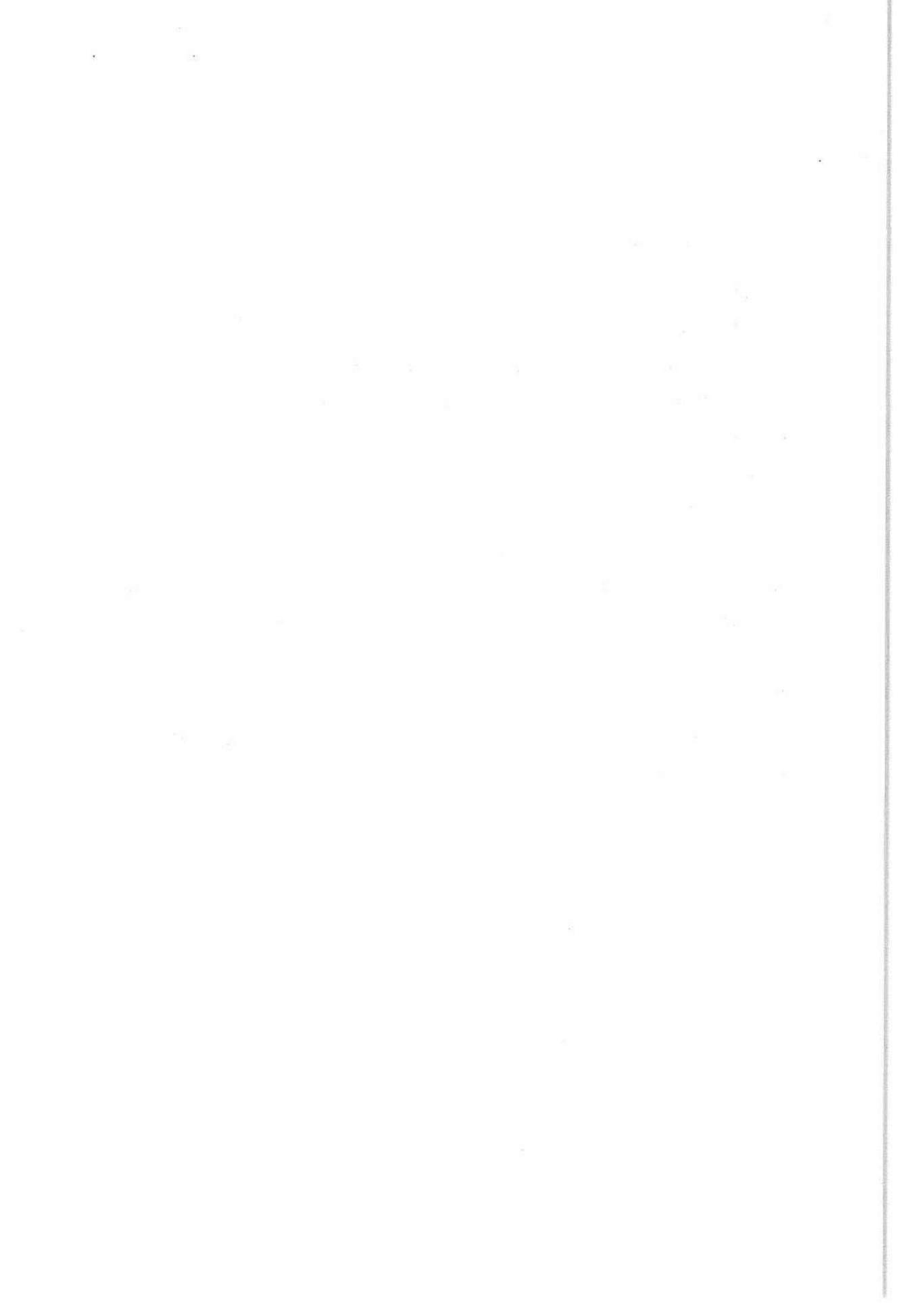
序 文

大芝東遺跡は、本村の中央部を流れる大泉川の右岸扇状地、大芝原の北端に位置している遺跡である。本遺跡は、森林から耕地化される際に、土器石器類の散布を見ていることにより、遺跡地としての確認はなされていたのであるが、中央高速自動車道が計画されるに及び、県教育委員会が遺跡の分布調査を行なった折再確認され、昭和47年長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査団によって用地内の調査が行われ、住居址、土塚、溝状遺構等が発見された。今回は用地の西側か甬場整備事業により、それがしかも、49年度中に工事の終了をみななければならないと言う事態になったので、当教育委員会はその保護を行なうべく、県教育委員会の指導を仰ぎ関係機関と協議を行ない、南信土地改良事務所からの委託を受け、村文化財委員会が中心となり、発掘調査団を編成し調査を実施することになった次第であります。

発掘作業は寒風の中であったが幸い天候に恵まれ短期間に多大の成果を納め得たことは、指導主事桐原先生、友野団長の発掘地点の設定に当を得ていたことに依るものと思います。長年遺物散布地としか知られなかった遺跡が、調査の結果その実態が明かになり、地域の学習に大きな貢献をすることになったことを心より嬉しく思うものであります。発掘に当り指導を賜った県教育委員会、発掘を担当された友野良一先生をはじめ調査委員、文化財保護委員、発掘に協力をいただいた方々にたいし深甚なる敬意を表する次第であります。

南箕輪村教育委員会

教育長 安 積 正 一



例 言

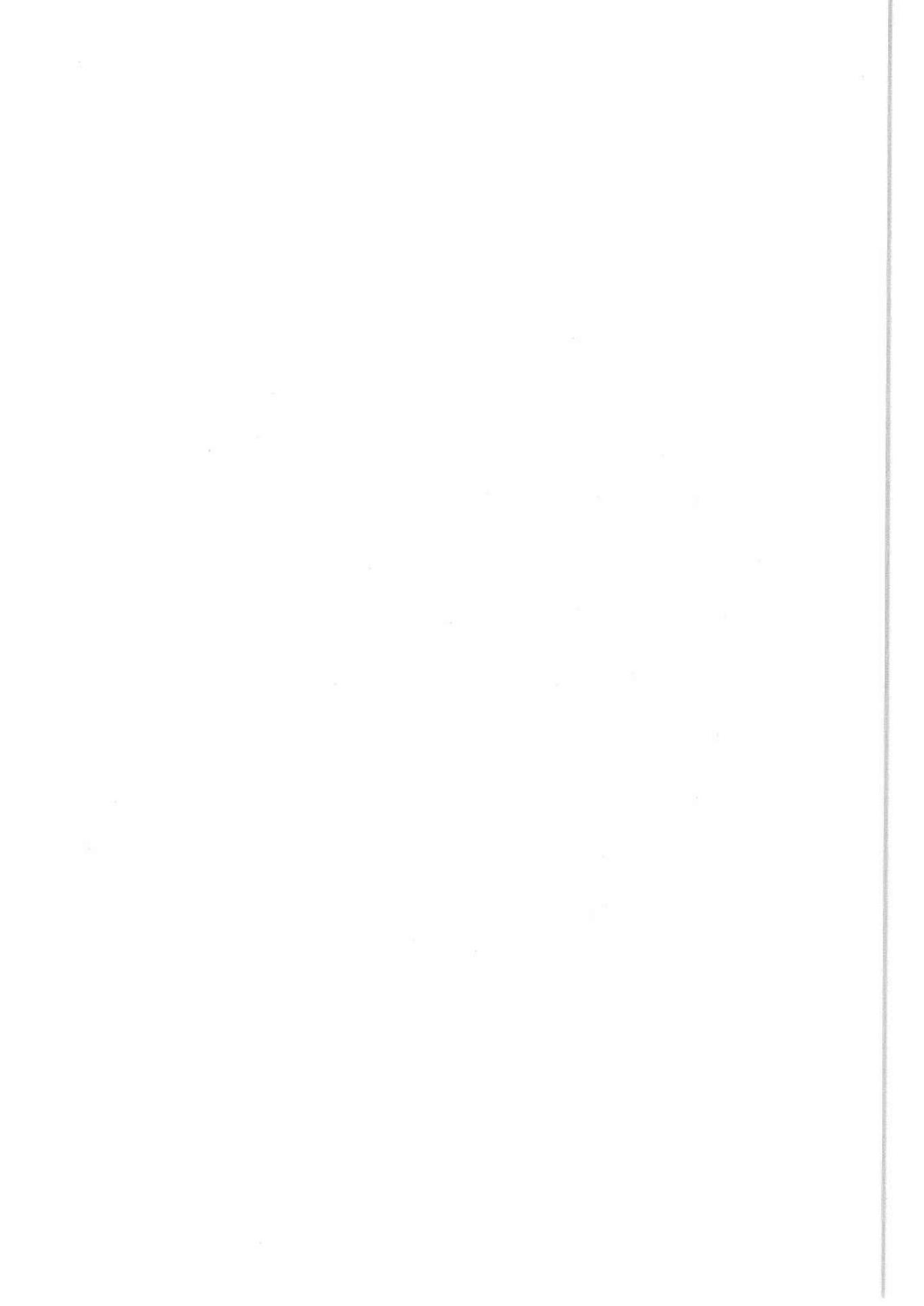
1. 本調査は、西部開発事業に伴う、埋蔵文化財の緊急調査報告書である。
2. この調査は、西部開発事業に伴う緊急発掘で、事業は長野県南信土地改良事務所の委託により南箕輪村教育委員会が実施した。
3. 本調査は、昭和49年度中に業務を終了する義務があるため、報告書は図版を主体とし、文章記述もできるだけ簡略とし、資料の再検討は後日の機会にゆずることとした。
4. 本報告書の執筆者は次の通りである。担当した項目の末尾に執筆者を明記し、その責任を明らかにした。

本文執筆者 友野良一，安積正一，清水常雄，山崎文直

図版作成者 友野良一，山崎文直

写真撮影 友野良一，山崎文直

5. 本報告書の編集は主として友野良一があたった。



目 次

序	
例 言	1
目 次	1
挿図目次	1
図版目次	2
第Ⅰ章 遺跡の環境	3
第1節 位 置	3
第2節 地形・地質	4
第3節 歴史的環境	6
第Ⅱ章 調査の経過	8
第1節 保護措置の経過	8
第2節 発掘調査の経過	10
第Ⅲ章 遺 構	12
第1節 第1号址 第2号址	12
第2節 第1号竪穴 第2号竪穴	13
第3節 土 壇	13
第4節 配石址	13
第5節 第1号柱穴址 第2号柱穴址	14
第6節 溝状遺構	
第Ⅳ章 遺 物	17
第1節 土 器	17
第2節 陶磁器	17
第3節 石 器	19
第Ⅴ章 ま と め	20

挿 図 目 次

第1図	位 置 図	3
第2図	遺跡附近の地形図	4
第3図	地 層 図	5
第4図	十三塚	6
第5図	南箕輪村遺跡分布図	7
第6図	発掘状況	10
第7図	発掘状況	10
第8図	発掘状況	10
第9図	遺構配置図	11
第10図	1号址	12
第11図	2号址	12
第12図	堅穴及び土坑	13
第13図	配石址	14
第14図	第1号柱穴址	14
第15図	第2号柱穴址	15
第16図	溝状遺構	16
第17図	土器拓影	18
第18図	灰釉陶器実測図	19
第19図	石器実測図	19

図 版 目 次

図版 1	地 形	21
図版 2	地形，発掘状況	22
図版 3	1号址，2号址	23
図版 4	第1号柱穴址，第2号柱穴址	24
図版 5	配石址，溝状遺構	25
図版 6	遺物出土状況	26
図版 7	陶磁器	27
図版 8	陶磁器	28
図版 9	参加者	29

第 1 章 大芝東遺跡の環境

第 1 節 位 置 (第 1 ~ 2 図 図版 1 ~ 2)

大芝東遺跡は、長野県上伊那郡南箕輪村大芝地籍に所在する。木曾山脈の北部経ヶ岳 1700m、大泉の所山に源を発する大泉川の右岸段丘上 (標高 763 m) に位置する。遺跡の面積は、東西 200 m 南北 110 m にわたって分布している。現在は畑地及び山林、飯田線北殿駅より西 3.3 km の位置にある。



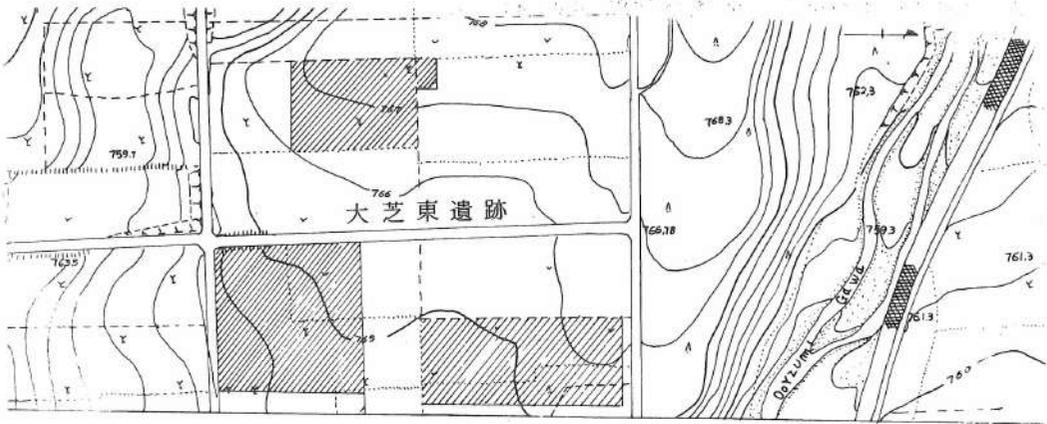
第 1 図 位 置 図

第1節 地形・地質（第1～2図，図版1～2）

木曾山脈と，赤石山脈はともに南北に走り，木曾山脈と伊那山脈との間を，諏訪湖を水源とする天竜川が，これらの山地から流出する多くの支流を合せ南下している。

天竜川の右岸には複合扇状地，河岸段丘を形成する砂礫層が，火山灰土をのせた伊那盆地在が広がっている。

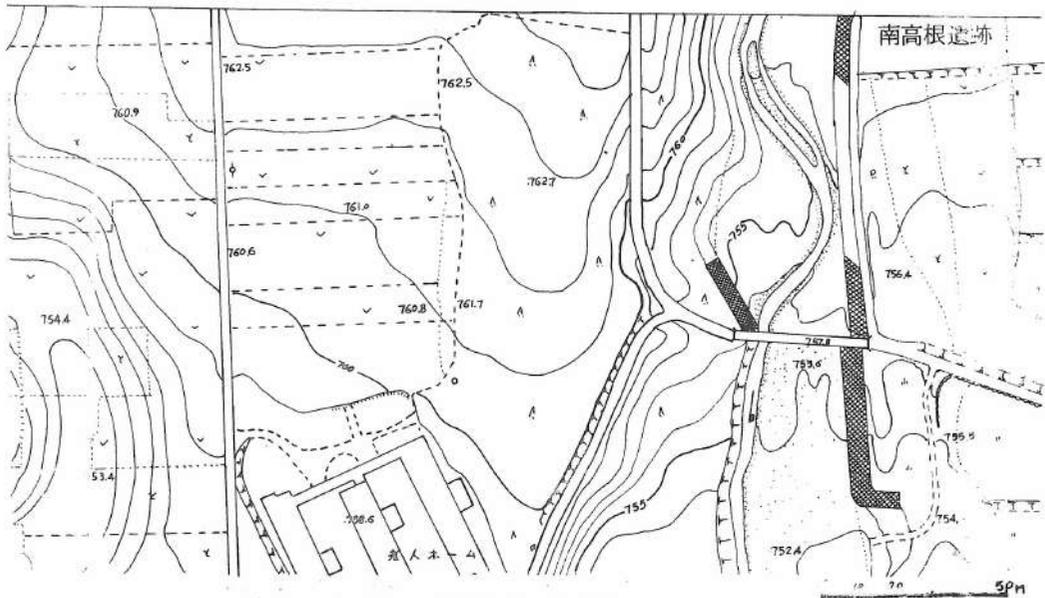
そのうち，伊那市～南箕輪村付近の東西の幅が最大で13kmの谷底平野で，東方からは三峯川の扇状地が，西より小沢川の扇状地，大泉川の扇状地が形成され，河岸段丘は4段に構成されている。



至伊那市

中央道

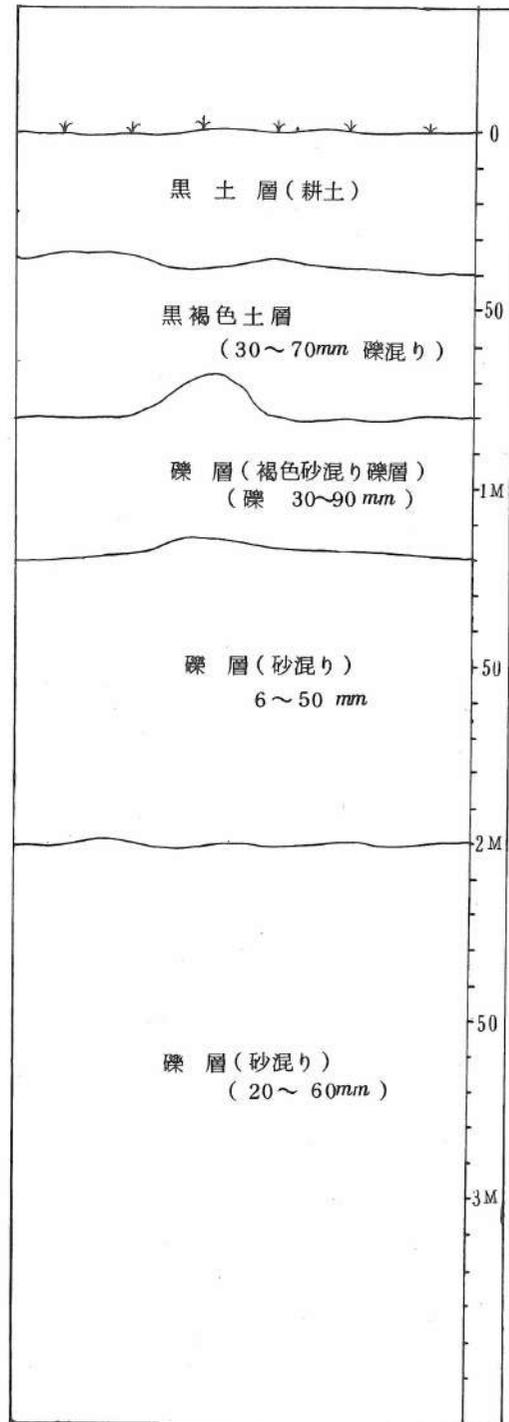
至辰野



第2図 遺跡附近の地形図

本遺跡は、大泉川の河岸段丘縁辺部に展開された長経200mの帯状遺跡と考えられる。標高は763~770のうちに所在する。天竜川よりの比高100mを測る。また、大泉川との段丘の比は7.48mで深い河川ではない。段丘は山麓から数えて第1段目の段丘に位置する。天竜川の河岸段丘は、上部大泉面、御子柴Ⅰ面、御子柴Ⅱ面、南殿面、木下面の5段丘に発達しているが、本遺跡は大泉面に該当するものである。なおこの遺跡の北大泉川辺には所々古い湧水のあとが窺われる。清水博之助氏の話に依ると、十三塚のうち西2号の北側の河原の一部が、どんなに雪が降っても積らない場所があり、古くはここが湧水地ではなかったかと語ってくれた。大泉川をへだって北には高根遺跡が所在するが、遺跡の南段丘縁には古い湧水のあとが見られる。

遺跡地は、上部鮮新世の所産である塩嶺累層（厚さ60cm以上）が基盤となって、その上に大泉礫層がのり、さらに御岳火山による信州ローム層が7m内外の厚さに堆積している。このローム層は二つの層に分かれる。下部から中期ローム層、新期ローム層に分類されるがこの間に神子柴礫層がはさまる。この間には7枚の浮石帯が見られる。新期ロームの上層部はウルム氷期の最末期の所産とされている。その上に30~60cmの黑色土層が堆積し地表面をなしている。この黑色土層と新期ローム層との間に黒褐色土層が存在している。地質学的には、軟質ロームは黑色土の漸移帯と考えているが、考古学ではローム層として処理している。遺物は主として黑色土層下部から、遺構はこの新期のローム層上部に所在するのが一般的であるが、本遺跡では礫層中にも発見されている。（上伊那郡誌より）



第3図 地層図

第2節 歴史的環境（第4図）

南箕輪地籍に分布する遺跡を概観すると、伊那盆地を南流する壮大な河成段丘を形成した天竜川にそってある遺跡は、15-内城遺跡、14-北垣外遺跡、13-柴宮遺跡（縄文）。17-垣外遺跡。16-上人塚遺跡（縄文・古墳）18-天白遺跡、昭和42年、（縄文中期・弥生後期，土師）発掘。19-向垣外遺跡（縄文・弥生，古墳）。20-山ノ神遺跡（縄文・弥生）21-丸山遺跡（古墳）天王遺跡。大清水川沿岸に分布している遺跡は、1-大泉遺跡，2-御子柴遺跡Ⅱ，御子柴遺跡Ⅲ，4-御子柴遺跡，昭和33年以来3回にわたって調査が行なわれ、かの有名な御子柴型石器を出土した遺跡である。大泉川に沿った遺跡は、12-田畑遺跡（縄文），10-宮ノ上遺跡，9-大泉遺跡，（大泉部落の南）大泉部落は文禄の頃開通したと伝えられる春日街道の由緒ある部落である。（縄文，古墳時代）6-北高根遺跡，中央道埋蔵文化財発掘調査団によって調査された遺跡（縄文早期，前期，中期，後期，晩期，弥生後期，土師，中世）の遺構遺物を出土した遺跡である。5-南高根遺跡（縄文中期・平安）8-大芝東遺跡（縄文中期，後期，晩期，灰釉）本遺跡は中央道埋蔵文化財発掘調査団の手によって調査された遺跡である。27-高根遺跡昭和47年度大規模農道緊急発掘調査団によって調査された遺跡である。土城5，堅穴3（縄文中期・灰釉陶器）片が出土した。11-南原遺跡。7-大芝西遺跡（縄文）戸谷川



第4図 十三塚 上1号 中2号 下3号



- ① 大清水遺跡 ② 神子柴遺跡Ⅱ ③ 神子柴遺跡Ⅲ ④ 神子柴遺跡 ⑤ 南高根遺跡 ⑥ 北高根遺跡
 ⑦ 大芝西遺跡 ⑧ 大芝東遺跡 ⑨ 大泉遺跡 ⑩ 宮ノ上遺跡 ⑪ 南厚遺跡 ⑫ 田畑遺跡 ⑬ 柴宮遺跡
 ⑭ 北垣外遺跡 ⑮ 内城遺跡 ⑯ 上人塚遺跡 ⑰ 垣外遺跡 ⑱ 天白遺跡 ⑲ 向垣外遺跡 ⑳ 山の神遺跡
 ㉑ 丸山古墳 ㉒ 南原遺跡 ㉓ 三本木原遺跡 ㉔ 曾利目遺跡 ㉕ 沢尻北遺跡 ㉖ 天王遺跡
 ㉗ 高根遺跡

第5図 南箕輪村遺跡分布図

に面した遺跡，24—曾利目遺跡，中央道埋蔵文化財発掘調査団による調査された。23—三本木遺跡（縄文中期）沢尻の北戸谷川の左岸，沢尻北遺跡等が主な遺跡である。

十三塚。大泉川右岸段丘に分布する塚で現存する塚は中央道西に1・2・3号中央道にて破壊されたと考えられるもの幾基かと中央道の東に現在2基存在するが，南側が道路になっている関係で或は道路敷で破壊されたかも知れない。現在5基存在するので8基は何らかの形で破壊されたものである。十三塚は発掘しても何の遺物も出土しないのがこの塚の特徴である。現在では建造年代も明でないが，仏教的な色彩が強いと云われている。現在上伊那の所々に存在するが，満足に残っているのは希である。南箕輪村では大芝東遺跡に存在するのみである。1号直径4.6m 高さ42cm 2号直径2.6m 高さ32cm 石碑が建られている。3号は一番大きく直径7.1m 高さ50cmを測る。

（友野良一）

第Ⅱ章 調査の経過

第1節 保護措置の経過

大芝東遺跡は，昭和43年12月実施された長野県教育委員会主催による中央自動車道建設に伴う埋蔵文化財分布調査の際，再確認された重要な遺跡である。今回西部開発による造成工事が実施するに当り，昭和47年度中央道埋蔵文化財発掘調査団の手によって調査が行われた。用地内の西側に当る箇所であるので，長野県南信土地改良事務所は，行政担当区域である南箕輪教育委員会に調査を委託した。南箕輪教育委員会は，急拠，県教育委員会と協議して，関係者の参集をもとめ保護措置を計った結果，事前に学術調査を行って記録保存を実施することとなった。

49. 11. 25. 南信土地改良事務所橋爪主任，役場沢田農林課長が教育委員会を訪れ，整備事業の実施に伴う，埋蔵文化財の調査の依頼を受けた。

49. 11. 12. 県教育委員会桐原指導主事の派遣を願い現場で指導を仰ぐ。午後沢田農林課長，教育委員長，教育長，橋爪主任等今後の調査について指導を受ける。調査団長に友野良一氏御願することに決定する。早速飯島町教育委員会が調査中の町谷遺跡に友野良一氏を訪問団長を依頼する。

49. 12. 13. 伊那建設事務所中村用地課長に友野良一氏派遣申請の件にて安積教育長が陳状する。

49. 12. 14. 村文化財保護委員会を開き大芝東遺跡発掘調査について協力要請の了承を得る。

49. 12. 15. 南信土地改良事務所と発掘調査と甬場整備事業の計画の打合せ及び発掘調査契約について話し合いあり。

49. 12. 16. 友野団長現地調査を行ない，調査契約について打合せをする。

49. 12. 18. 友野団長，清水常雄次長，沢田課長，有賀教育委員長，耳塚委員，現地調査を行ない調査方法について話し合う。

49. 12. 20. 南信土地改良事務所と調査契約について打合せ。

49. 12. 23. 南信土地改良事務所と南箕輪村長と大芝東遺跡発掘について900,000円にて契約を結ぶ。但し特別の遺構発見の場合は別に再契約をすることも考える。

49. 12. 25 友野団長と細部の打合せを行なう。

49. 12. 26 南箕輪村文化財保護委員会，大芝東遺跡発掘について経過の説明及び予算の確認，
調査期間について話合う。(清水常雄)

発掘調査委員会

委員長	教育委員長	有賀録男
副委員長	代理	堀 千冬
委員		有賀士郎
"		征矢友衛
"	文化財専門委員	堀 健一
"	"	清水博之助
"	"	征矢定雄
"	"	清水文治
"	"	耳塚正秋
"	"	原 市雄
"	"	澤田 清
事務局長	教育長	安積正一
事務局	教育次長	清水常雄
"	教育委員会書記	山崎文直

大芝東遺跡調査団

団 長	友野良一	日本考古学協会員
調査員	清水博之助	上伊那考古学会員
"	堀 健一	南箕輪文化財専門委員
"	征矢定雄	"
"	清水文治	"
"	耳塚正秋	"
"	原 市雄	"
"	澤田 清	"

第2節 発掘調査の経過 (第6～8図)

12月14日(土) 発掘石器を中央道埋蔵文化財調査事務所より借用のため村役場建設課のダンプカーで、教育委員会山崎文直、南箕輪村文化財委員清水博之助、征矢定雄の3名で運搬、一時老人ホームに保管。

1月6日(月) 8時30分作業開始
発掘器材を現場に運搬。天幕を大芝区有林に設営、発掘器材の点検等を行い調査に備える。午後A地区に3×3m区割のグリッド中央道用地寄りから西へA～E、道路寄りより南へ21を設定する。耕土の調査を行なったところ、縄文中期の土器片がC-2グリッド附近から出土した。16時本日の作業を終る。

1月7日(火) 8時30分作業開始
調査はA地区より行なう。グリッドA～Dの18グリッドまで調査。A-7グリッドから1号土坑、B～Dの8～11間に第1号柱穴址、C～Eの13～16グリッドに第2号柱穴址、D～14に配石址を発見。16時作業を終了する。

1月8日(水)
作業中止

1月9日(木) 8時30分作業開始
A地区A～D18～21グリッドの調査を前日に引続いて実施。A19より第1号堅穴を発見、B地区の調査では第2号堅穴を発見する。C地区の調査も続いて行なう。C地区からは溝状遺構が発見される。

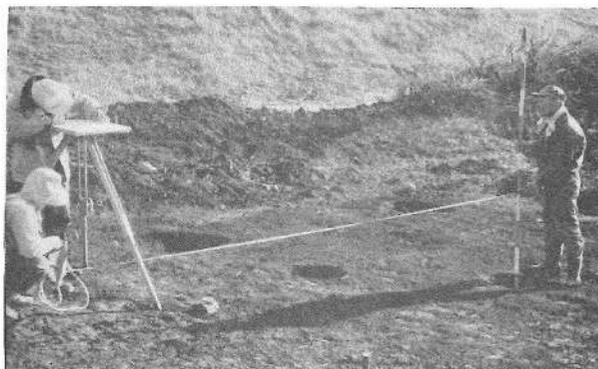
1月10日(金) 8時30分作業開始、前日に引き続きC地区の発掘を行なう。溝状遺構の清掃及



第6図 発掘状況



第7図 発掘状況

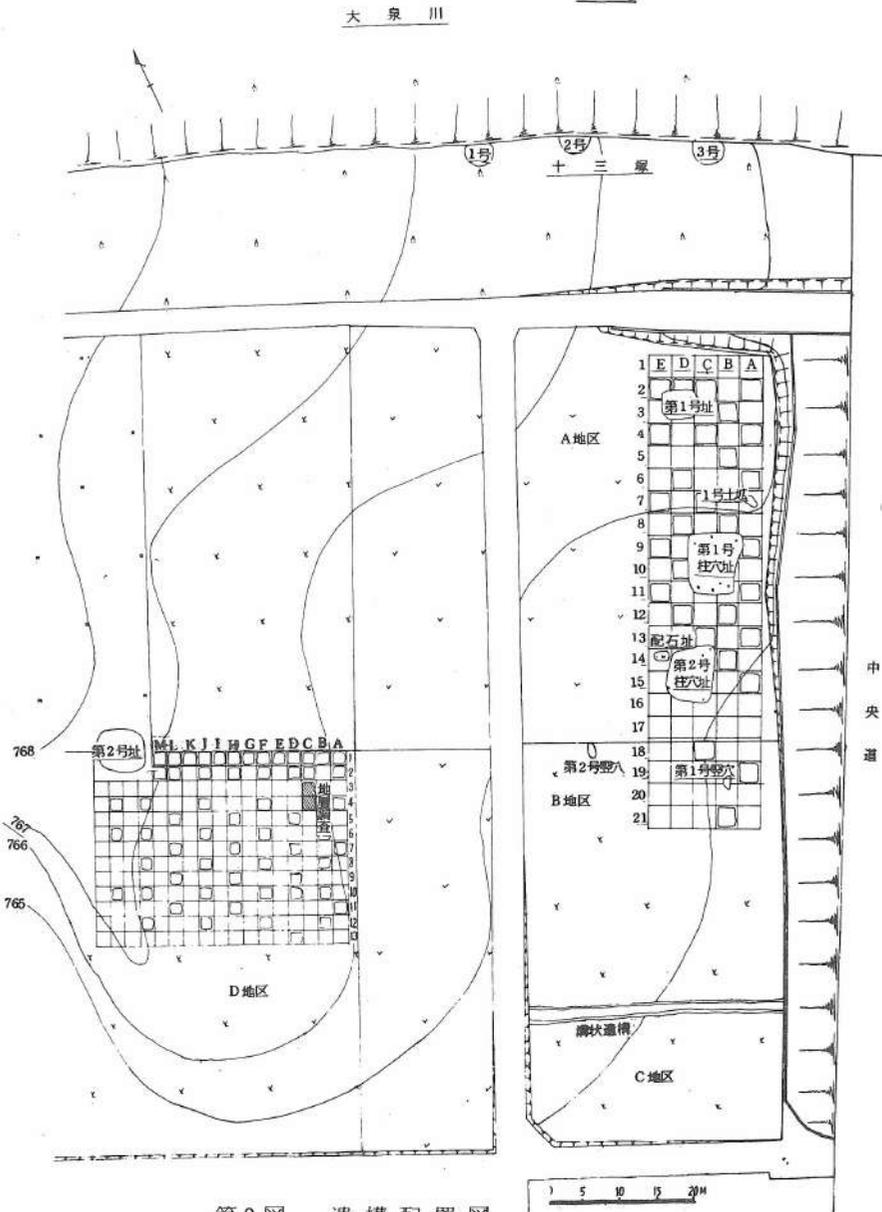


第8図 発掘状況

び写真撮影を行なう。D地区には2×2mのグリッドA～Qと南北に18区画を設定。O、PQ+1、O-1、P₁に第2号址を発見。A～M-1-2グリッドに集中して調査を行なう。

1月11日(土) 作業8時30分開始、本日はD地区に全力をあげ調査を行なう。2号址の調査を終り、実測 写真撮影を行なう。他の遺構も役場建設課の職員をお願いして実施する。D地区C-3・4に地層調査の穴を掘り地層の調査を行なう。

1月13日(月) 天幕及発掘器材を片付ける班と、記録もれの箇所の調査とに別れて作業を行なう。午後は中央道調査事務所より借用器材の運搬と遺物の整理を行ない、作業を終了する。(山崎文直)



第9図 遺構配置図

第Ⅲ章 遺 構

第1節 第1号址

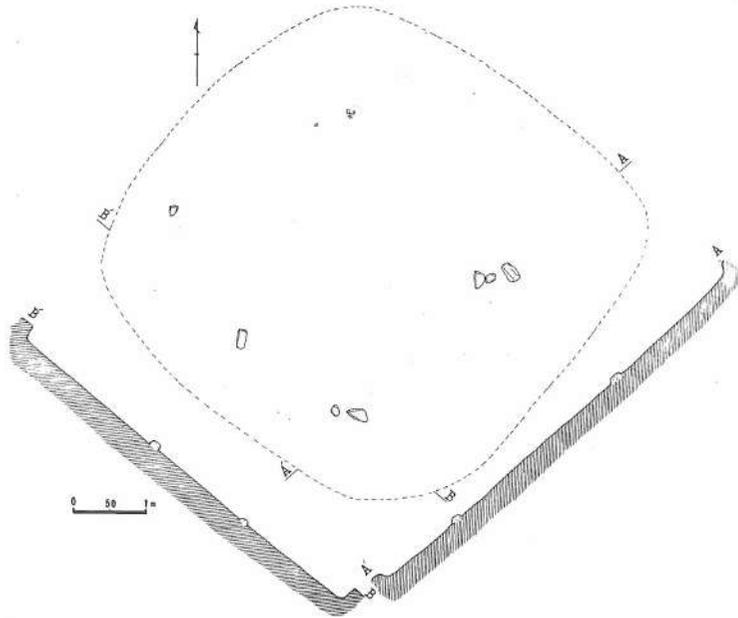
(第7図, 図版3) A地区道路添に発見された遺構である。地表面より50cm位下った礫混り黒色土層面に検出された。その規模は南北6.5m, 東西7.10mの隅丸方形と考えられる範囲に一定の面が堅く踏固められ, 実測図で見る如く, 東北の隅と南北の隅寄りに硬砂岩

30×15cmの上面が平に磨いた石が3箇並んで発見され, 当時の常民の協同作業場であったかと考えられる。堅く踏固められた床面上には縄文式中期の土器片が発見された。

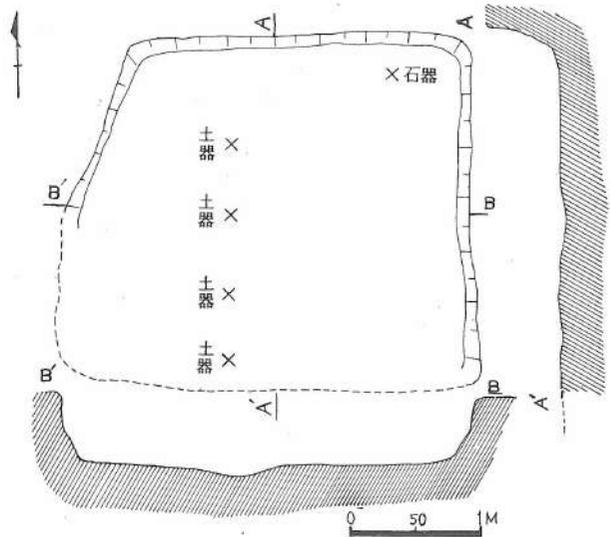
第2号址 (第8図 図版3)

D地区の西北の隅に発見された遺構である。地表面より40~50cm位下った黒土層面に検出された。その規模は東西3m北壁は確認し得たが, 南壁はかく乱が甚だしく発見はできなかった。遺構中央や、西寄りに頭大から拳し大の花崗岩とホルンヘルスの自然石が投げ入れられた状態で検出されたが, 配石ではない。床面は東半分が堅く跡固められていたが, 西側はやゝ軟らかであった。柱穴らしきものは発見できなかった。遺物は耕上中か

床面に至る間に発見されたが。特に中央や、西寄りに並列状に集中していた。発見された遺物は、縄文中期初頭, 縄文中期中葉, 縄文中期末葉。石器は打製石器。



第10図 第1号址

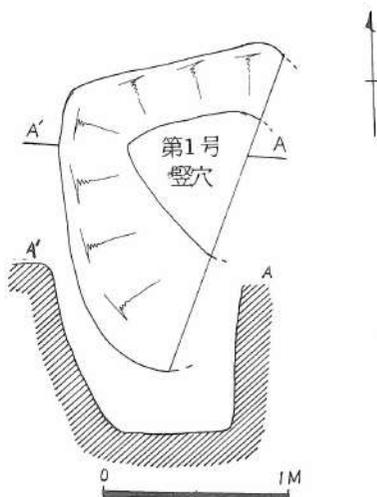


第11図 第2号址

第2節 竪穴

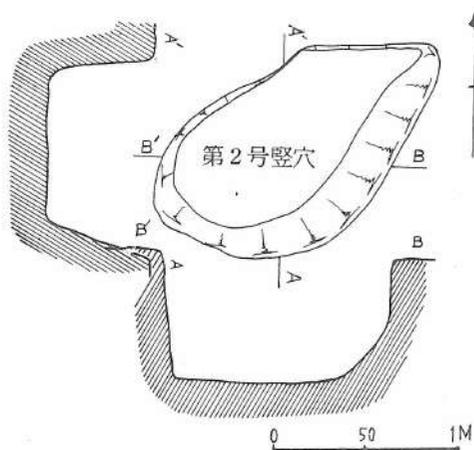
第1号竪穴 (第9図)

本遺構は、A地区B-19と20の中間に発見された竪穴址である。規模は南北1.8m、東西は土砂堆積上半分程度しか発掘し得なかったが、南北と同じ位の規模と考えられる円形プランと推定される。壁は内側に湾曲した形状、壁面には何等の施設も認められなかった。低部は東西に長い楕円形をなし、かたく踏固められていた。壁外の施設は明でない。遺物は発見されなかった。従って竪穴の時代不詳。



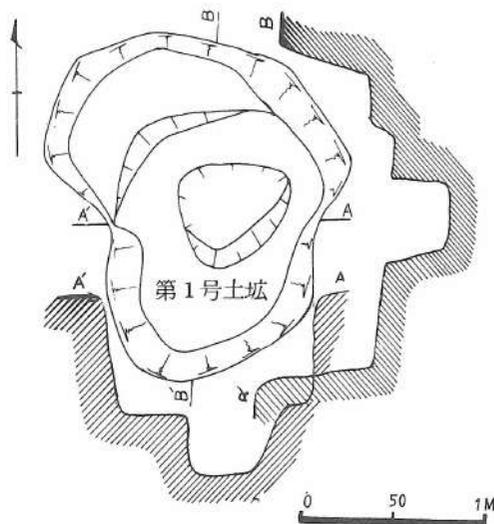
第2号竪穴 (第9図)

本竪穴は、B地区に所在し、第1号竪穴の西北19mの位置に発見された竪穴である。竪穴の規模は南北に細長く長径1.75m、東西1.2mを測る楕円形の竪穴である。壁は西側と北側壁が直壁に近く、東から南壁はやゝゆるやかである。壁面には何等の施設も認められなかった。低部は平で余り堅くはない。壁外の施設は何も発見されなかった。遺物は出土しなかった。



第3節 土 塚 (第9図)

本土塚は、A地区のA-7グリッド内に発見された。その規模は南北2.3m、東西1.1mの南北に長い楕円形をなす土塚である。土塚は二段に掘り込まれ第1段は45~55cm、2段目は丸味を帯びた三角状で、東西60cm、南北55cm、深さ30cm、低部はやゝ西に傾斜し硬く叩かれていた。地層は黒色土の礫層に掘り込まれていた。遺物は発見されなかった。



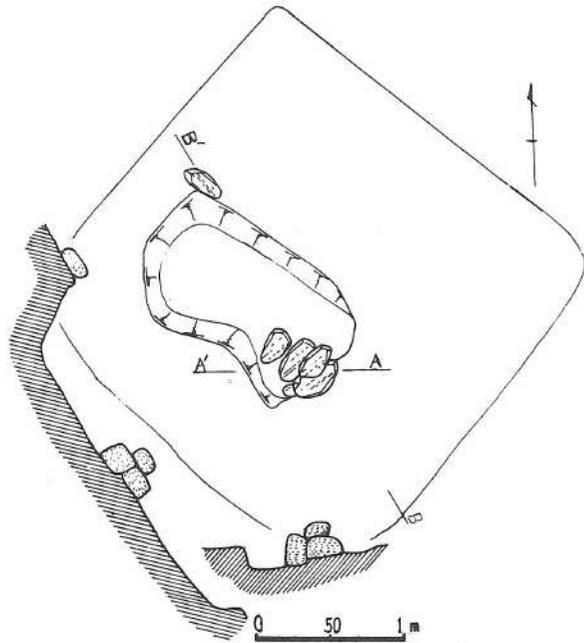
第4節 配石址

(第10図、図版5)

本址は、A地区のE-13グリッドに発見された配石址である。規模は配石の周囲を2.8

第12図 竪穴及び土塚

m深さ40cm内外黒色土を掘り凹め，さらにその内を東西90cm南北1.5m深さ15cm隅丸方形に掘り込み，長経30短経15cm硬砂岩で，いずれも表面を研いた痕跡のある自然石を5箇積重ねた状態で発見された。他の1箇は同じ大きさの硬砂岩の自然石が1.5mの位置に検出され，同じ種類のものと考えられる。配石の附近はかたく踏固められていた。遺物は発見されなかった。

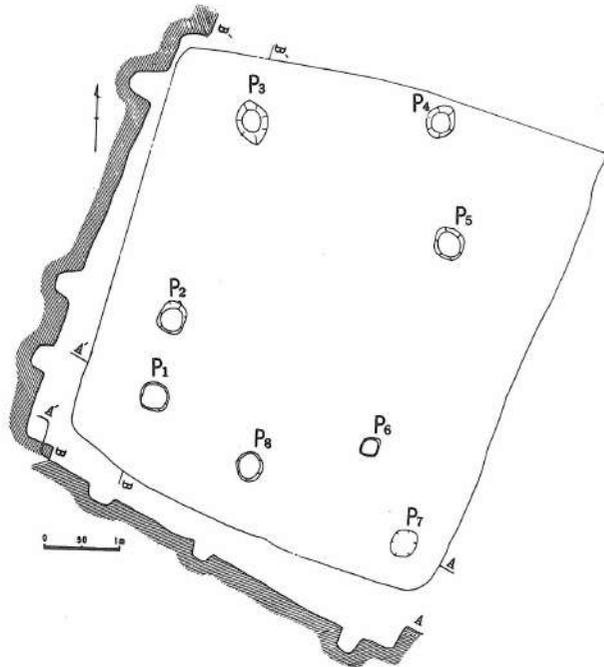


第13図 配石址

第5節 柱穴址 (第11図，図版4)

第1号柱穴址

本址は，A地区のA～D—8～11グリッド内に発見された柱穴である。黒色土を40～60cm掘り込み黒色の砂礫層に作られたもので，東南に3～4度の傾斜をなし，北半分程がやゝかたく踏固められていたが，他はさほどかたくはなかった。本址の規模は東西5.5m南北6.2mを測る。柱穴の数は全部で8箇発見した。大きさは表に示す楕円形と長円形である。深さは20cm～41cm。低部は平のもの

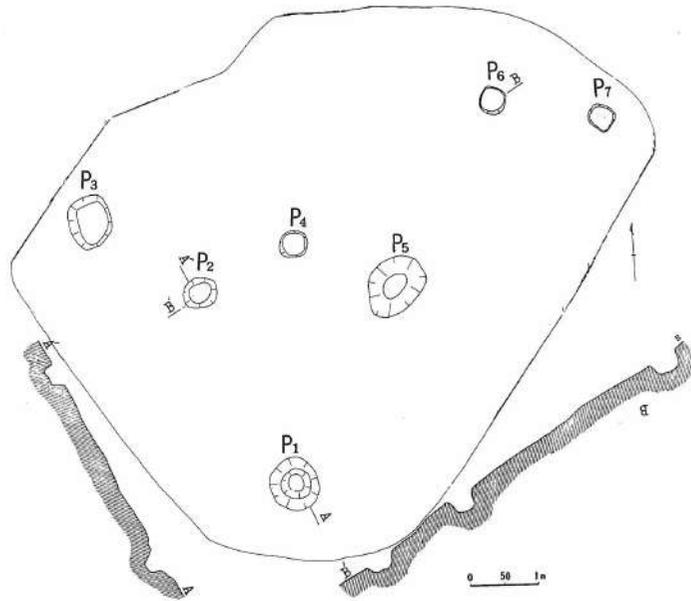


第14図 第1号柱穴址

番号	長経cm	短経cm	深さ	形状
1	38.00	37.00	22.00	円形
2	42.00	36.00	26.00	"
3	59.00	42.00	41.00	長円
4	45.00	40.00	31.00	円形
5	46.00	40.00	33.00	"
6	26.00	24.00	28.00	"
7	35.00	53.00	25.00	"
8	40.00	56.00	20.00	"

第1表

と丸低のものと二種類である。低部はかたく叩かれていた。P₁とP₂との間隔は90cm P₂とP₃は2.7m, これは建築上許容される間隔であるが, P₄がやゝ北に開過ぎていたが柱間間隔は2.5cm~2.6cm芯々であるので間隔的には許容される。P₁とP₆とは柱間間隔が2.7mであるので, 柱間間隔としてはよい。中間のP₅は南に片寄っていて繫梁とともに考えられない位置にあたるが, あるいは, 棟木を支える棟持柱穴と考えた方が妥当かもしれない。P₄とP₆とはP₁とP₃と並行して



第15図 第2号柱穴址

柱間間隔は2.7mであるが, 柱間間隔がいささか長く繫梁の持放しが困難であるので, P₅を曲材をもって使用したかも知れない。以上小屋組を推定してみた。本址に直接関係すると考えられる遺物はなし。

第2号柱穴址(第15図 図版4)

本址は, A地区のC~Dの13~16グリッド内に発見された柱穴址である。規模は東西9m, 南北7m長方形のプラン内に7箇の柱穴と考えられる穴が発見された。柱穴の寸法は, 第2表に示したとおりである。柱穴の掘り込まれた面は地上から30~40cm黒色土層中であつたため壁と思われる箇所は見当らなかった。柱穴面は北三分の二程がかたく南に行く程やわらかかった。柱穴柱床の面は南東の方向に3度40分~4度10分内外の傾斜を有している。P₁, P₃, P₆は一直線上に並ぶ柱穴で, P₁とP₃の柱間間隔は3m, P₃とP₆との柱穴間は3mである。P₁とP₂との柱間は3mを測が, P₂の柱穴はやゝ内側に位置する。P₅はP₂の西北に当る位置にあり, その間隔は1.7m, P₁とP₅との柱間隔は4.3m, 柱間としては, 中間に支柱のない限り持放は無理がある。P₂は曲材により支柱であつたかも知れない。

番号	長径	短径	深さ	形状
1	80cm	70cm	23cm	円形
2	50	42	23	"
3	74	62	18	楕円
4	37	36	25	円形
5	97	78	22	楕円
6	89	37	20	円形
7	42	40	25	"

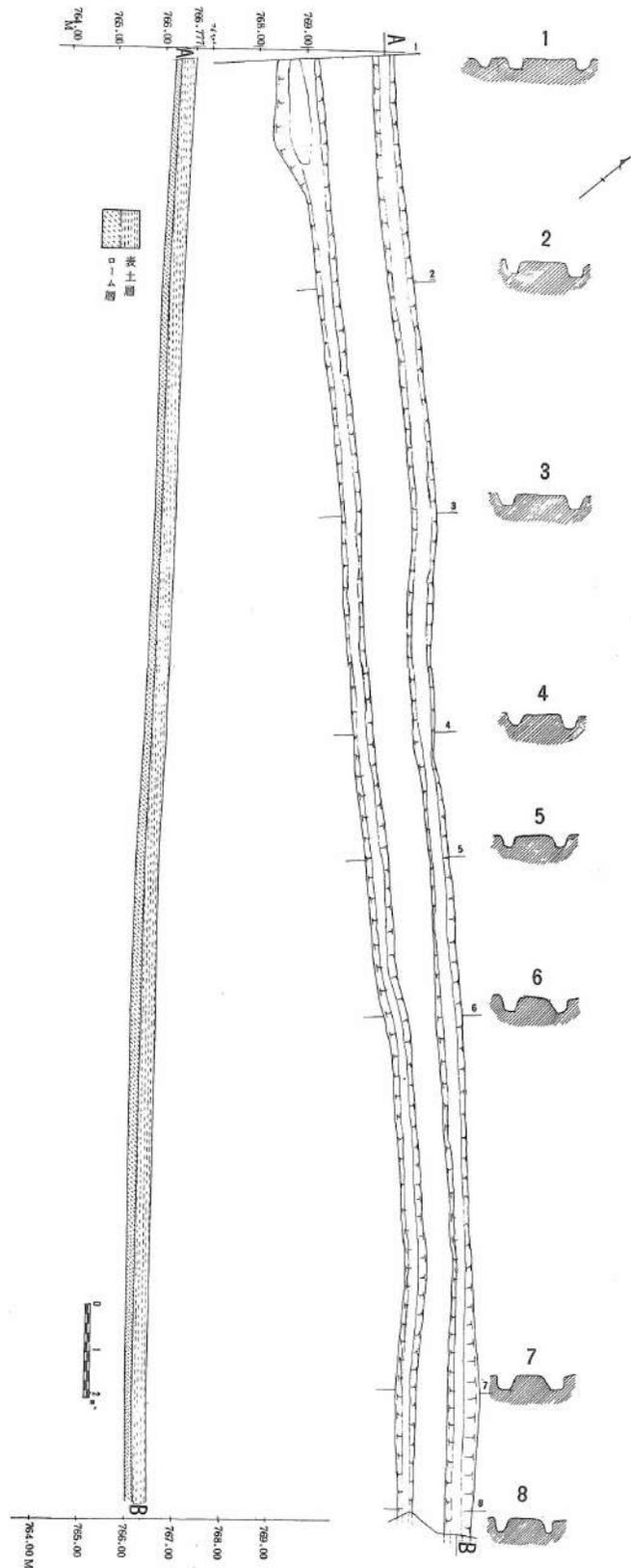
第2表

この二方向の柱穴は建物上考えられ得るが, 東側には柱穴らしきものは発見されなかったが, あるいは黒土中にあり痕跡を止めなかったかも知れない。遺物は発見されなかった。従つて時代は不明である。

第6節 溝状遺構

(第16図 図版5)

本遺構は、C地区の中央に発見されたものである。遺構は遺跡の中央を通ずる道路までのびる。西方は調査したが道路を横切り西の畑まで走るようである。東も中央道敷地より50cm西迄調査したが、用地内迄のびる状態である。遺構の走る方位は第四象限300度の方角である。発掘した長さは東西27.5m、溝は二条あって二条とも畧々並行して走る。溝と溝との幅は広い箇所では1.6m、狭い所で1mを測る。溝の幅は上端で50~55cm、低部で18~20cm、深さは15~20cm。低部は特別かたく叩かれてはいなかった。また、溝の壁にも何等の施設も発見されなかった。遺物は溝の壁に接して土師式土器片が検出された。



第16図 溝状遺構

第Ⅳ章 遺物

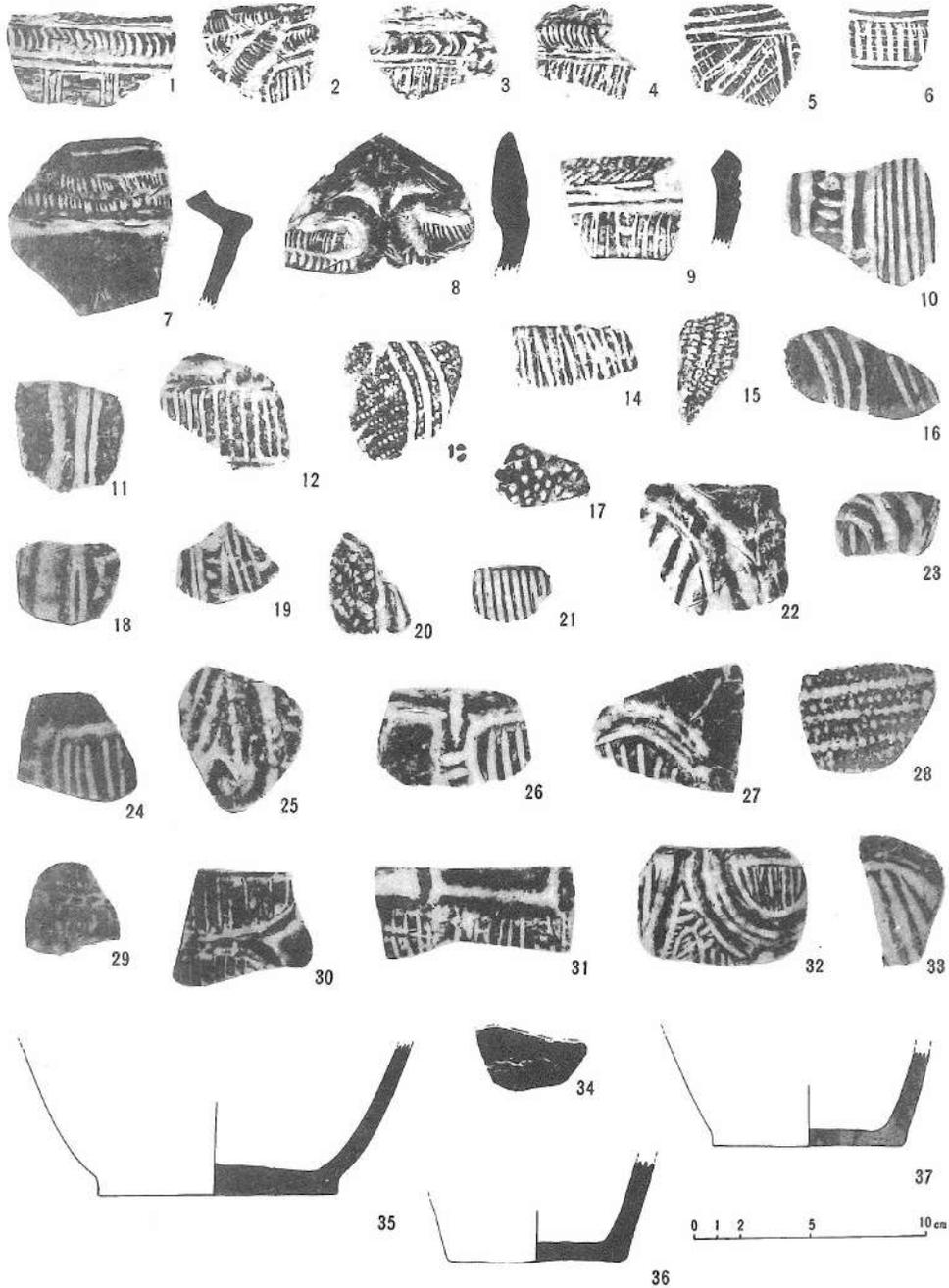
第1節 土器(第14図)

1の土器は、A地区AトレンチBより出土した土器で、器型は深鉢と考えられる。文様は半截竹管による連続爪形文を施し、その下に横走する沈線文と縦位に竹管による並行沈線文を施し、地文は無文である。2の土器は、A地区AトレンチB-7グリッドより出土した土器である。半截竹管による連続爪型文を縦及び斜方向に施しその間には隅を丸くした区画を作り内部に竹管具による並行沈線文を施した土器。3の土器はA地区C-9グリッドから発見された土器である。1と同じく横位に荒い半截竹管による連続爪形文と縦に竹管による並行沈線文が施されている土器。4は3と同じ土器である。5は横位と斜方向に隆帯が施され、そのうらを斜方向に竹管による沈線文の上を細い竹管で井桁状に文様を構成した土器である。6はA-C-9グリッドから出土した土器である。半截竹管による並行沈線文を横に細い竹管により引いた文様の土器である。7はD地区P-1出土の土器である。口縁部がくの字に曲った鉢形の土器と考えられる土器である。文様はくの字の口縁部の内側に連続爪形が施された土器で他は無文である。8は、口縁波状の口縁部で、隆帯文に連続爪型文を施した土器である。9は、D地区の西2号址発見の土器、口縁部に縄文と縦に半截竹管による並行沈線文を施した土器。10は、A地区A-C-3グリッド出土の土器、太い隆帯を中心に両脇にやゝ細い隆帯を施し、太い隆帯に篋状施文で掘り凹めた文様を施し、その左右は半截竹管で並行沈線文を施した土器である。11は、A地区C-3グリッド発見の土器。太い隆帯と細い隆帯を施した土器である。12, 13, 15, はA地区A-C-3グリッドより発見された土器片である。半截竹管による並行沈線文と、地文に縄文を施した上を円形に並行沈線文を付した土器、小破片でよくわからないが斜縄文を施した土器。16, 18, 19, 20, は1号址出土の土器である。並行沈線文、隆帯文、突刺文等を施した土器である。17, 21, 22, 23, 24, 25, 26, 27, 28, 29, の土器は2号址より出土した土器片である。半截竹管による並行沈線文、隆帯文等を主とした文様構成の土器である。30, 31, 32, 33, の土器はD地区のD-0, D-P-1より出土した土器である。隆帯文の区画内を半截竹管文で施文した土器片である。34は、D地区より表採した弥生式後期の土器片で、今回の調査では一片発見されたのみの土器であり、小片であるが波状文が施されている。35, 36, 37, は縄文土器の低部でわりあい薄手の無文土器である。

第2節 陶磁器(図版7~8)

1は、横道下の地区から出土した陶器である。器形は高台の皿で、猿投窯産、胎土は灰色轆轤仕上、焼成は良好、釉調は透明に近い薄黄色である。平安中期に比定されるもの。2は、横道下地区より出土した灰釉陶器である。器形は皿、高台。猿投窯産、胎土は灰色、焼成良好、低部に轆轤痕が美しくのこっている。釉が低部であるためほんの僅かしか見えない。平安中期。

3は、1、2と同じ横道下地区から出土した灰釉陶器である。高台の大碗で高台部が外方でくの字に内曲し、高台も高い、胎土は灰褐色、焼成良好、轆轤仕上、釉は透明の灰緑色、猿投窯産、平安中期。4は、灰釉皿、猿投、高台、轆轤仕上、釉は口縁部内外に、色調灰色、胎土灰褐色、平安



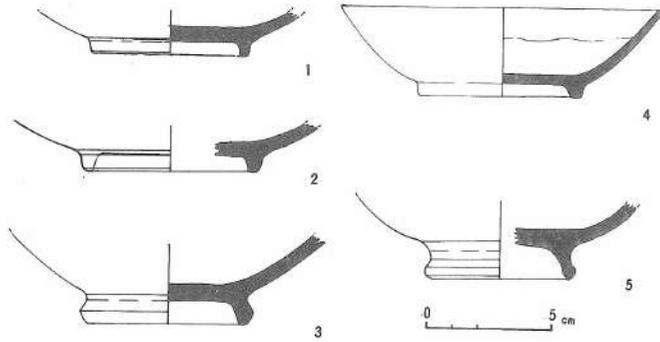
第17図 土器・拓影

中期。5は、灰釉陶器、器形は大碗、高台、轆轤仕上、胎土は灰色、焼成良好。6は、灰釉の大碗、産地は猿投窯、胎土は灰褐色、焼成良好、轆轤仕上、釉は灰緑色内外に施してあるもの。7は、灰釉碗、猿投窯産、透明の施釉、表面に轆轤痕がみられる。

8は、灰釉皿、猿投窯産、胎土灰褐色、釉は透明色、焼成良好、

9は、灰釉陶器、猿投 皿の口縁部、灰緑釉。10は、灰釉大碗、猿投窯産。11は、灰釉平碗、猿投窯産、胎土は灰黒色、

緑がかった釉を施してあるもの、焼成良好薄手の陶器、時代は平安時代中期のものである。

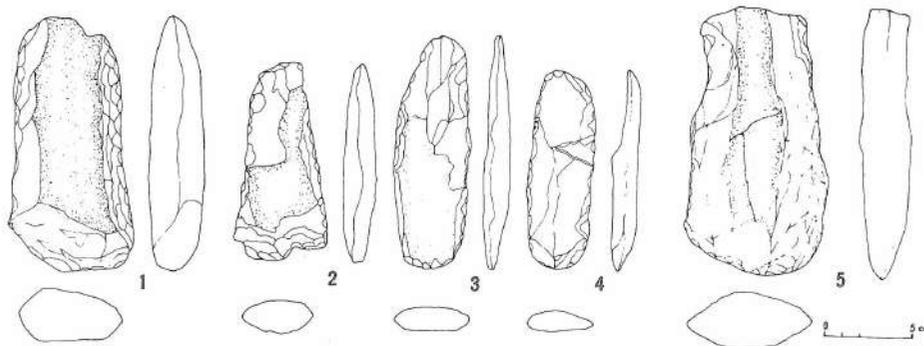


第18図 灰釉陶器実測図

12は、山茶碗、産地は美濃、胎土は茶褐色、釉は目立たない。水引痕が見える。焼成良好。鎌倉時代のもの。13は、碗、灰釉陶器、猿投窯。14は、鉄釉の壺。産地は瀬戸、江戸時代。15は、磁器、湯のみ茶碗、瀬戸産、梁付、江戸末期のもの。16は、磁器、鉢、白釉、瀬戸産 江戸末期。

第3節 石器

石器の出土量は極めて少なかった。器形は短ざく形での打製石斧である。材質は硬砂岩。出土は1はA地区B-15グリッド。2は、A地区C-13グリッド出土。3は、A地区B-15グリッドから発見。4は、A地区1号竪穴内出土。5は、D地区2号址より出土。いずれも打製石斧である。



第19図 石器実測図

第 V 章 ま と め

調査は49年12月末に準備がなされ、1月6日より同月13日まで行なわれた。経ヶ岳より吹きおろす寒風は身を刺す寒さであった。

本発掘は昭和49年度は場整備事業による緊急発掘である。

大芝東遺跡は、昭和47年度長野県中央道埋蔵文化財調査団によって、用地内の調査が行なわれた。その結果縄文中期初頭の住居址、灰釉陶器を伴う住居址、土坑17基、その外溝状遺構6本が発見された。また、遺物としては、縄文早期、前期、中期、後期、晩期、平安時代の灰釉陶器片が多量に発見された。これ等遺物の発見に依り、本遺跡の性格を知ることができたことは、遺跡を挟んで東西に広がっている大芝東遺跡の今後の調査に大きな貢献をもたらしたのである。

今回の調査は、中央道用地の西側の一部東西100m、南北100mのま場整備地区内に限定された箇所の調査で、遺跡は大泉川に添って上流迄広がっている広い遺跡である。また、中央道用地の東側にも遺跡は大泉部落の方向につづいている広大な遺跡である。中央道調査で1.6ヘクタール、今回の調査で1ヘクタールの面積が調査されたが、まだ大芝東遺跡の全体の性格を知ることができないので、今後の調査に期待をかけた。

今回の調査で得た二、三の問題点について述べ、まとめとしたい。

まず、第一に掲げたいのは大芝東遺跡を取囲んでいる遺跡の状態を把握しておいて考える必要があるので、極く簡単に述べ参考にした。

昭和47年中央道発掘調査団は、大芝東遺跡を調査した後引続いて、大泉川の北岸南高根遺跡の調査を行なった。本遺跡は大泉川の段丘下に所在する特殊な遺跡である。遺構は東壁に石組粘土カマドをもつ平安時代の住居址と、土坑が発見された。遺構外発見の遺物は、縄文早期、前期、中期、晩期平安時代等の土器及び陶器が数多く発見された。この遺跡は大泉川の河床よりわずか高く大泉川の古い河床に所在すると言う遺跡で、特に注目される遺跡である。段丘の北は北高根遺跡である。この遺跡からは、縄文時代前期の住居址2軒、中期の住居址3軒、弥生時代後期住居址5軒、中世の住居址2軒、柱穴群4、土坑37基が発見され、伊那谷のこの期に於ける研究に一つの問題を投げかけてくれることになったのは、大きな成果であった。この発掘に引続いて南箕輪教育委員会が、土地改良事業の関連で、南高根・北高根の西側に当る。高根遺跡を調査した。その結果土坑5基、竪穴址3基を調査した。2号土坑からは縄文中期の土器片、1号土坑からは鎌倉期の陶器片が検出された。竪穴址から11世紀後半の灰釉陶器、鎌倉時代の内耳土器等が発見され、上伊那では飯島町南羽場遺跡について中世の遺構として注目されるものである。そのほか、縄文前期・中期の遺物が数多く発見された。こうして開発による調査で大芝東遺跡を囲む大泉川左右岸に分布する遺跡の性格が明かにされたことは、考古学上大きな成果であった。発掘された地域は極く限られた遺跡の一部と考えられるので、その周辺にはもっと多くの遺構が分布するものと考えられる。

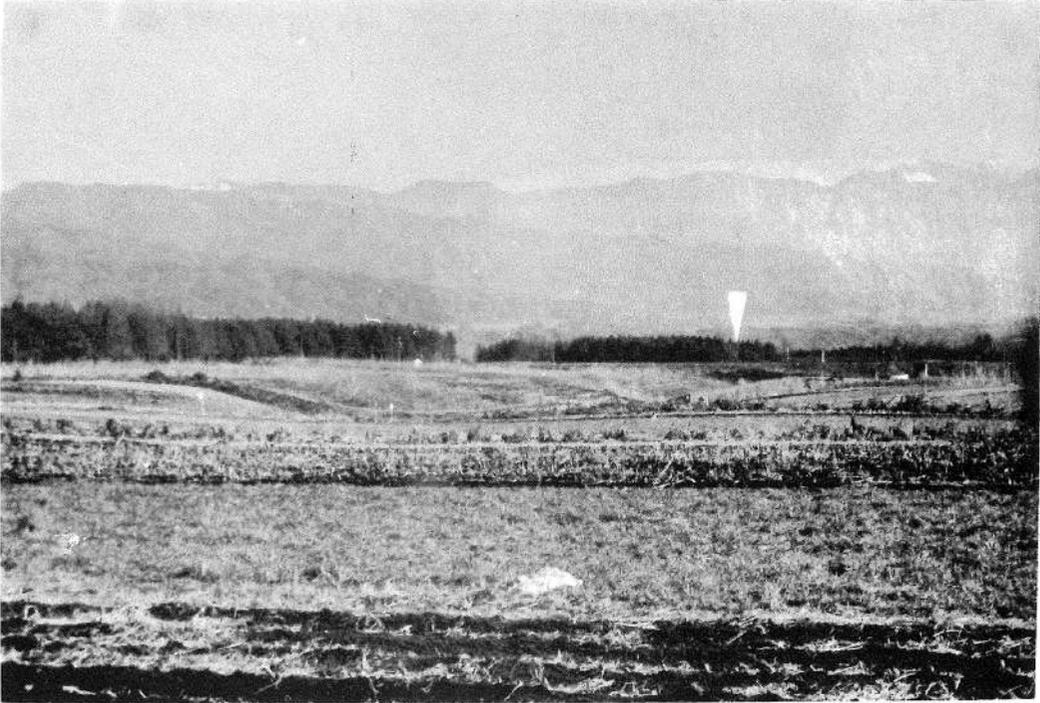
本遺跡発見の遺構、第1号・第2号址はたしかに人工を加えた遺構で住居址の性格のものと思われることもない遺構である。

柱穴址及び柱穴群は、柱間隔開の状態からして、掘立建物の復原を試みられる要素がいささか整っていない状況である。本址に直接関係ある遺物は発見されないところより、時代は不明である。

溝状遺構、中央道にも発見されたが、何の目的で作られたものか研究を要する遺構である。以上主だった遺構について述べたのであるが、本遺跡は、集落の中心的存在ではなく集落の付随的施設として考えた方がより妥当な考え方ではなからうか。

終りにあたって、地元南箕輪村、南箕輪教育委員会、南信土地改良事務所、伊那教育事務所、県教育委員会の御支援に対し心より感謝の意をささげたい。

(友野良一)



大芝原より大芝東遺跡を望む



図版 1

大芝東遺跡

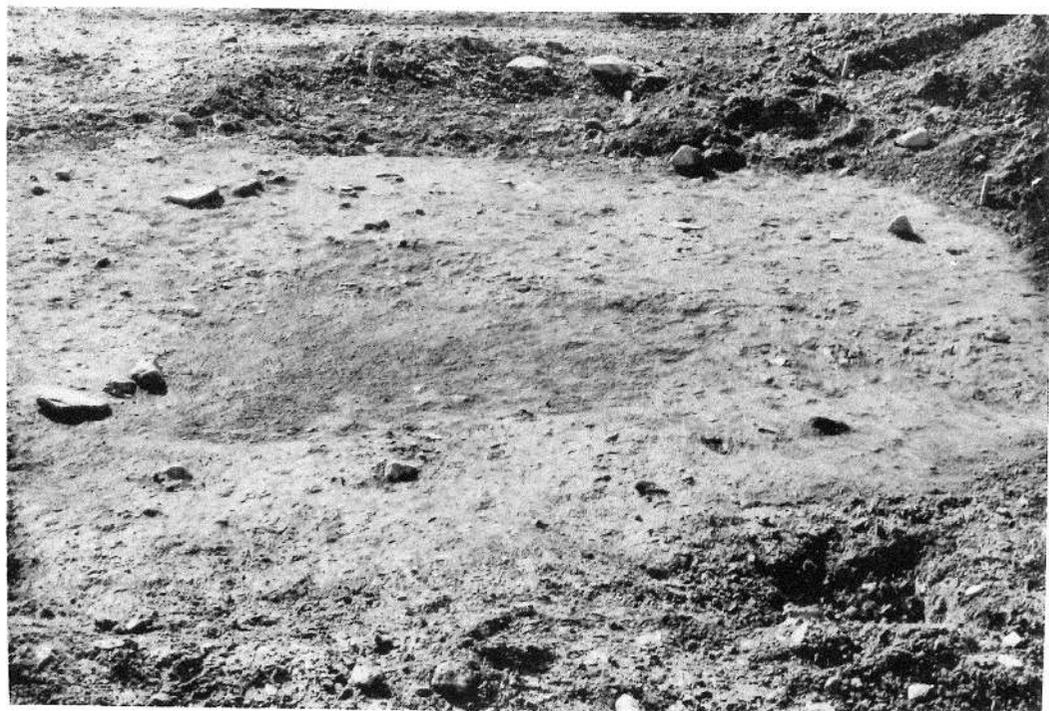


大泉川



図版 2

A地区発掘状況



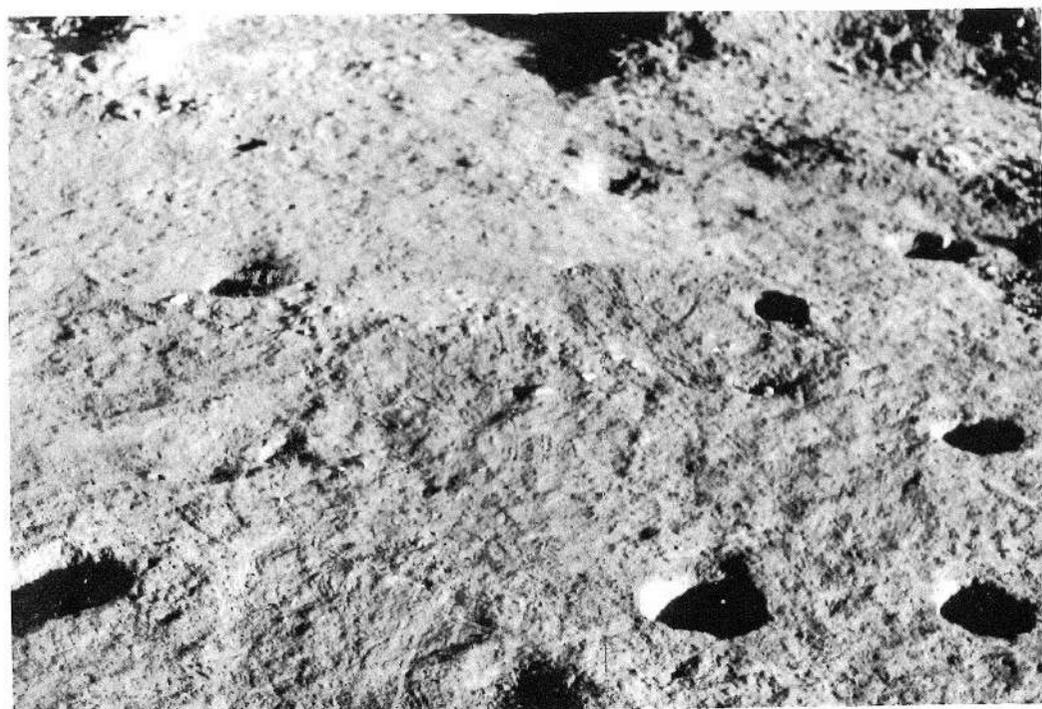
第1号址



第2号址



第1号柱穴址



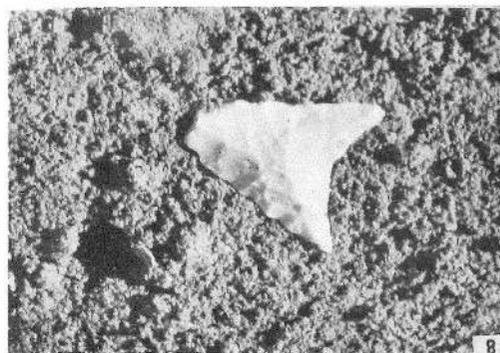
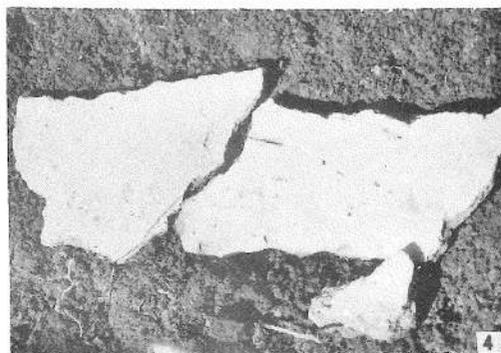
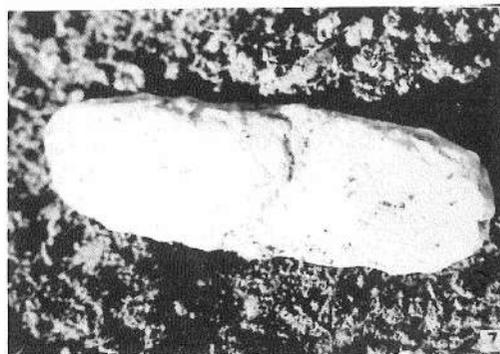
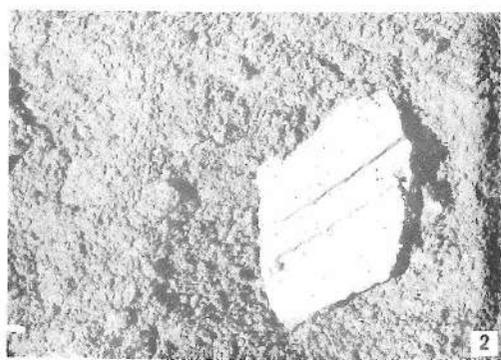
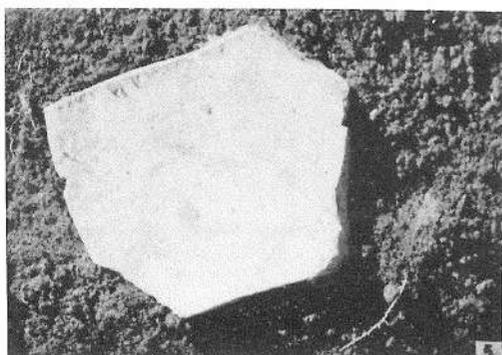
第2号柱穴址



配石址

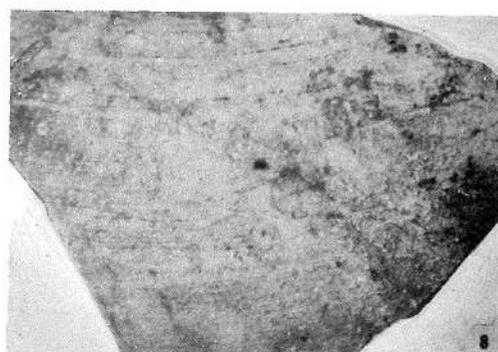
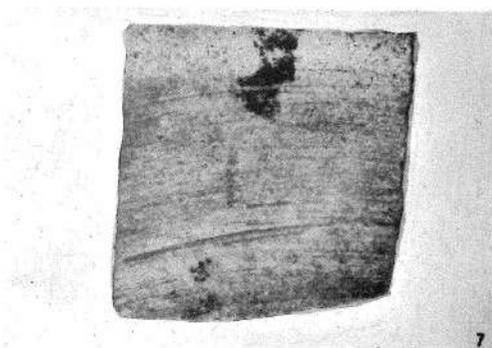
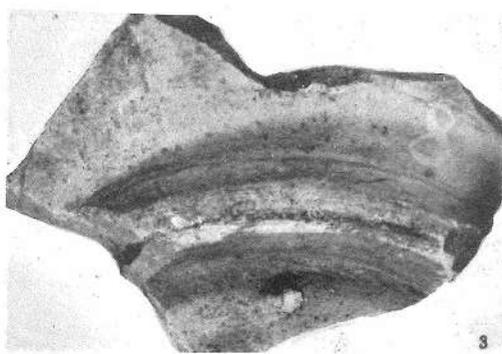
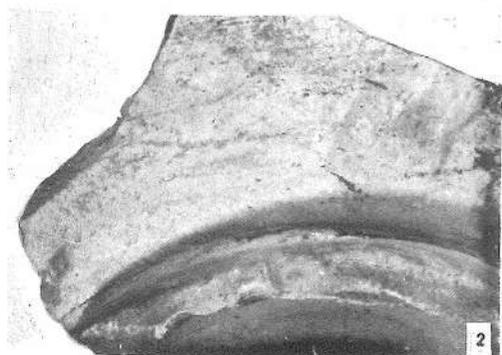
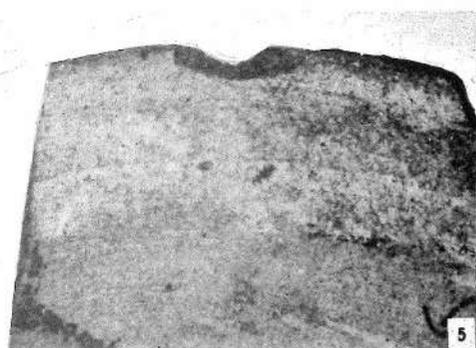
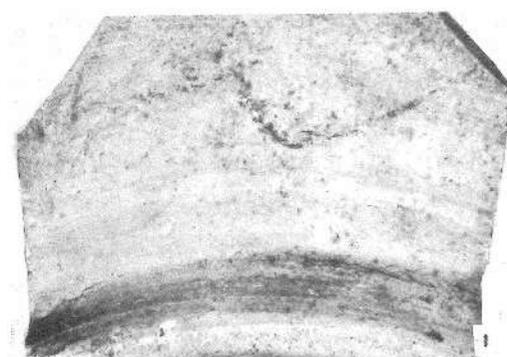


溝状遺構



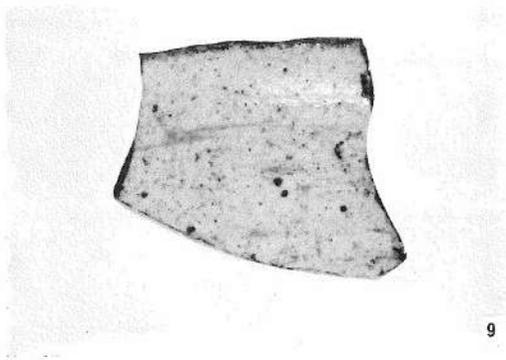
图版 6

遺物出土狀況

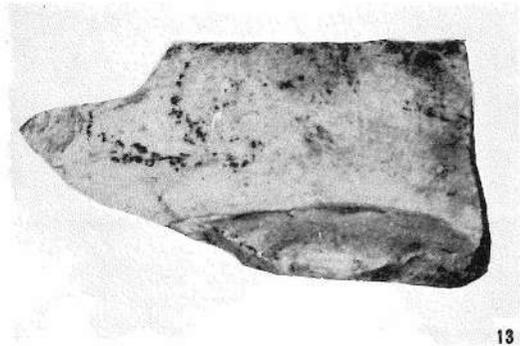


图版 7

陶磁器



9



13



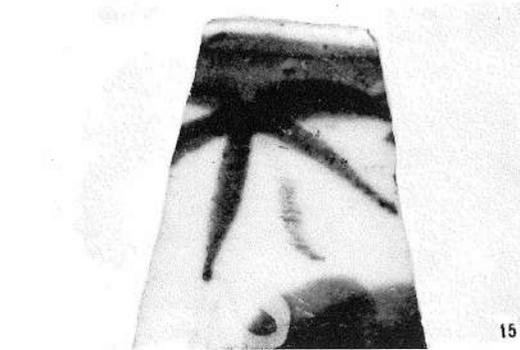
10



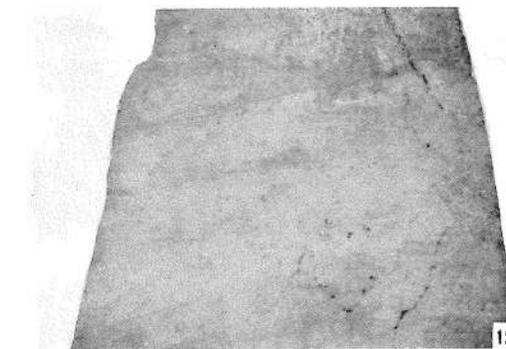
14



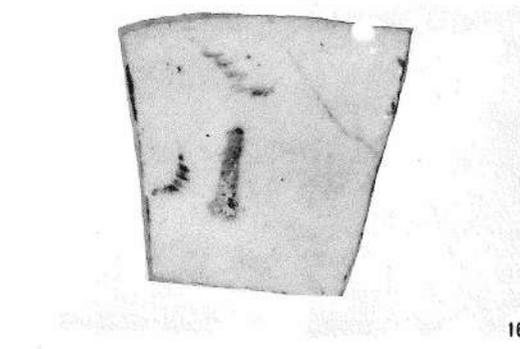
11



15



12



16



図版 9

参加した方々

大 芝 東 遺 跡

— 緊急発掘調査報告 —

昭和50年3月25日 印刷

昭和50年3月29日 発行

発行所 長野県上伊那郡南箕輪村
南箕輪教育委員会

印刷所 長野県伊那市美簗上大島
みすず創美社